上方落語「百年目」お花見するにも慎重に いつの時代も人の目が…

四月は花見の季節。造幣局の通り抜けが気になるが、コロナ禍で慎重になってしまう。せめて幕末の錦絵「浪花百景」から桜の名所を集め、誌上観桜会でも企画してみようと考えていると、「ここで逢うたが百年目」という敵討ちの台詞がふと浮かんだ。桂米朝師匠の十八番、上方落語の名作「百年目」を思い出したからである。

船場の大店（おおだな）に堅物の番頭がいる。この御仁、律儀者だが裏では遊びもたしなみ、こっそり桜宮へと屋形船で花見ときめこんだ。ばったり出会ったのが店の旦那さん。えらい姿を見つかって真っ青になり「ご無沙汰いたしました。」と奇妙な挨拶をして逃げ帰る。

店にもどって番頭はその夜、不届き者めと追い出され、のれん分けもご破算ではないかと一睡もできない。しかし、旦那さんから「こんどはわしも誘うてや」と許されてめでたしとなる。この噺の落ちが、毎日、顔をあわせているのに「ご無沙汰いたしました」と妙な挨拶をしたことを問われ、ここで逢うたのが「百年目やと思いました」となるわけである。

「浪花百景」の花見の絵にも「ありゃま、見つかった」という感じの作品がある。絵師の一珠斎国員（いちじゅさいくにかず）の「あみ嶋風景」（表紙）と「天満ばし風景」である。

まずは表紙をご覧いただきたい。舞台は大川にかかる天満橋。陣笠の武士が、あっと驚いてあらぬ方を指さしている。扇をひらひらさせたお供の若侍が隣にいて、釣り竿に魚籠（びく）をさげた男も驚いたのか何事かと振り返る。背景には屋形船が浮かび、現在リニューアル工事中の藤田美術館（都島区網島町）のあたりだろう、「心中天網島（しんじゅうてんのあみじま）」ゆかりの網島の土手は桜が満開である。遠く生駒の山並みが連なる。

「あみ嶋風景」（左）と「天満ばし風景」（右）（ともに浪花百景・大阪市立中央図書館蔵）。二つつなげると物語が生まれる。

そこでもう一点の「天満ばし風景」を見てみよう（本ページ図版）。二つを横に並べると一つの画面となり、物語が生まれる。天満橋の上を黒い羽織に袴すがたの同心か与力のような侍が渡っている。右は大坂城で細い川は鯰（なまず）江川（えがわ）、舟が行くのは寝屋川である。現在とは異なり寝屋川は、昭和初期の付けかえまで天満橋の下流で大川と合流していた。振り分け荷物の旅の男と二人の女の視線は侍に向けられ、この侍が絵の主人公であることがわかり、並べると陣笠の武士が驚いたように指さしていたのが、黒い羽織の侍であることは明らかだ。

これをどう読み取るかは自由だが、私の解釈はこうだ。陣笠の武士は身分の高い役職だが、陽気につられて職場に内緒で、お気に入りの若侍と花見（背景の桜が暗示）に行った。「浪花百景」には、天満橋以北の桜の名所に「さくらの宮景」のほか、「天満樋の口」（北区樋之口町）や「北妙（きたみょう）けん堤（づつみ）」（扇町公園から天神橋筋商店街を横切った堀川沿いの堤）などがあり、これらを巡って桜三昧してきたのではないか。

その帰り道、逃げ場のない橋で、ばったりと部下に出くわした。天満橋を南に渡っているので、陣笠は大坂城周辺の幕府関係者かもしれない。落語の番頭よろしく「ここで逢うたが百年目」である。

眉毛がつり上がる「天満ばし風景」（部分）

羽織の侍の仏頂面は、「約束の時間を忘れてどこに行ってはりましたんや」ともとれるし、いつもエラそうに小言をたれる上司に対し「自分たちはのんきに花見ですか、いいご身分ですな…」というぼやきも聞こえてきそうだ。

さて医療関係の皆さんのご苦労は申すまでもなく、私たちもそれぞれ苦労してきた一年だが、人の目がこれまで以上に気になる昨今である。ユーモラスな錦絵さえも、シビアな現代につながるように感じられてくる。

筆者プロフィール

橋爪 節也　はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葭堂―なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の現像―』（創元社）など。